

一八八三年十月十六日(火)

ドワキネーシヨル
南神村にてコジャーガルのラクシユミー満月の日——一八八三年

〔ラカール、バララームの父、ベニー・パル、校長、マニ・マリツク、イシヤン、キシヨリー・グプタ
たちと共に〕

今日は火曜日、一八八三年十月十六日、アツシン月三十日。バララームのお父さんほか、様々な信者たちが来ている。バララームの父親は至って信心深いヴィシユヌ派信者なので、いつも称名用の数珠を手でつまぐっている。頑迷なヴィシユヌ派の信者たちは、他の宗派の人たちを毛嫌いして付き合おうとしないが、バララームの父親は聖ラーマクリシユナのところへ時々来てお話を聞いているので、そういった頑迷さはないようである。

聖ラーマクリシユナ「広くて高い心をもった立派な人たちは、どんな相かたちの神々でも皆みとめているよ——クリシユナでもカーリーでもシヴァでもラーマでも——」

バララームの父「はい。一人の亭主がいろんな風態をしているようなもので——」
聖ラーマクリシユナ「でも、貞操堅固ひたむきな信仰(ニシユタ・バクテイ)というものがある。ゴープイーたちがマトウラーに行つてターバンをつけたクリシユナを見て、ベールを下ろして顔を隠した。そして、『こ

の人はいったい誰？ 私たちのクリシュナ、あの黄色い服を着てクジャクの羽を頭に飾ったクリシュナはどこにいるのかしら？」と言った。

ハヌマーンのもひたむきな信仰だ。ドヴァーバラ(訳註2)の時代に、ドウワラカ(クリシュナの王国の首都)にやってきたとき、クリシュナは妃のルクミニにこうおっしゃった——「ハヌマーンはラーマの姿を見なければ満足しないだろう」それで、クリシュナはラーマの姿になって玉座に着いていらっしやっ
た」

〔聖ラーマクリシュナの驚くべき境地——絶対・相対間の遊戯の合一〕

「何だか知らんが、わたしのはまた一風変わった境地でね。わたしは永遠不変(ユナイター)の場から、遊戯活動(リイラー)の場を下りてきて、またリイラーの場からニティヤの国に行く。これをくりかえしているだけなんだよ。永遠不変の場に行き着くことをブラフマン智と言う。ほんの少しでも俗っぽい気持ちが残って

(訳註1) コジャーガル——コーは、誰か、ジャーガルは、起きるの意で、起きているのは誰か？ という意味で、アッシン月の満月の日に祈りを捧げている者にラクシュミー女神が祝福を与えてくれ、信者は断食をしてラクシュミー女神を礼拝する日。

(訳註2) ドヴァーバラ時代——ヒンドゥー神話による世界の四つの周期(クリタ時代、トレター時代、ドヴァーバラ時代、カリ時代)の繰り返しのうちの第三番目。現代は四番目のカリ時代で、時代が下るに従って人間の徳性が墮落していくと言われる。

は、行き着くことは出来ない。それはそれは難しいものだよ。大実母^マがヒマラヤ王の娘として誕生なすつたとき、父親の前でいろいろな相^{すがた}をとってお見せになつた。ヒマラヤが、『娘よ、私はブラフマンが見たいと思つているんだ』と言つたらマーは、『お父様、もし本当にそれを希^{ねが}つていらつしやるなら、あなたは出家修行者と交わらねばなりません。世間から離れて静かな処で独りになり、ときどき修行者たちといつしよにお暮らしなさいませ』と。

一から多^タが生まれているんだ。つまり、永遠不変^{ニテイヤ}のものから変化活動^{リイラ}がおこる。それから、多^タが無くなり、一も無くなる境地がある。だつて、一があれば二もあるからね。あの御方は何にたとえようもない——たとえてわからせる方法がないんだよ。闇も光のなかにある。わたしが光だと見ている光じゃない——この目で見える光じゃないんだ。

あの御方が境地を変えてくださるときは——変化と活動の世界に心を下ろしてください。するとわたしは、あの御方が、神様だの、マヤーだの、人間だの——この世界全部^{みんな}になつているの^(訳註3)が見えるんだ」

〔神^カが行^カ為^タ者^シ——あなたとあなたのもの〕

「時たま、あの御方は生き物や世界すべてをお造りになつたのだということをし、わたしに見せてくださる。ちやうど、旦那と旦那の庭みたい——。あの御方がご主人で、この世界も生物もすべてあの御方の所有^も、この考えこそ智慧というものだ。そして、私^ワがするんだ。私^ワは先生だ。私^ワは父親だ。

——こういうのが無知というもの。それに、私の家、私の家族、私の財産、私の友人、これも無知」
バララームの父「はい、仰せの通りでございます」

聖ラーマクリシュナ「あなた(神)が行為者」ということがわかるまでは、何度も何度も戻って来なけりゃならん——生まれ更かわってくるんだよ。あの御方だけが行為者」とわかれば、もう再生なんぞしなくていい。

トウフ、トウフ(あなた、あなた)にならないかぎりは、決してこの世から逃げられないよ！ 行ったり来たり、生まれかわりをくりかえすだけで、解脱は出来ない。それに、私のもの、私のもの」と言い張っていたって、どうにもなりやしない。旦那に雇われた管理人は、『これは私共の庭園でして。私共のベンチです。私共の家具です』なんて人に言っているが、いったん旦那からクビにされたら最後、自分用に使っていたマンゴー材の物入れ一つ持ち出す権利もない！

「私」と私のものが実在を覆いかぶしているので、真実ほんごのことがわからないんだよ」

(原典註1) 以下の聖典に、大実母マがヒマラヤ王にいろいろな姿を顕してくださいました様子が詳しく書かれている。

——デーヴィー・パーガヴァタム(デーヴィー・プラーナ) 第7巻31章及び35、36章——

——ムンダカ・ウパニシャッド 2・2・9——

(原典註3) お前は生まれるや否や一切処に現われる。

—— シュヴェエータシュヴァタラ・ウパニシャッド 4・3 ——

〔不二二元の智慧と神意識の覚醒〕

「不二二元の智慧を得なくては、チャイタニヤ(神意識)にはなれない。チャイタニヤを得れば、ニティヤーナダ(永遠の喜び)になる。大覚者の境涯が、ニティヤーナダだ。

ヴェーダーンタの考え方には、神の化身」というものはない。あの考え方では、チャイタニヤ様も不二二元の泡の一つだ。

チャイタニヤ、つまり、神の意識になる」とはどんな具合のものだと思ふ? マッチをすって、火がついて、闇の部屋がとつぜん明るくなるようなものさ」

〔神の化身あるいは人間の宝玉〕

「信仰を重んじる宗派では、神の化身を認めている。カルタバジャ派の女の人がわたしの様子を見てこう言っていた——『パパ(親子のような親しみを込めた呼びかけ)、あなたは本性をつかんでいらつしやるのですから、あんまりむやみに踊ったり跳ねたりなさいますな。熟したブドウの実は、綿の上にそつと大事にのせておかなくては——』。

お胎に子が宿つたら、姑さんはだんだん仕事を減らしてくれます。神を覚つた特徴は、だんだん仕事を捨てていくことです。あなたは人間の宝玉です』と。

それから、わたしが食べているのを見ていて、こう言つたよ——『パパ、あなたが食べているのですか? それとも誰かに食べさせているのですか?』と。

この「私」が智慧を隠しているんだ。ナレントラは、「この「私」が遠ざかっただけ、あの御方の「私」が近づいてきます」と言った。ケダルは、「瓶の中に泥が入っている分だけ、水は少ししか入りません」と言った。

クリシュナはアルジュナに言った——『弟よ！ 八大神通力のうち一つでも持っていたら、わたし（神）のところへは来れないよ』ほんの僅か、力が増すかも知れないがね！

薬をつくってやる坊さん、病氣直し、祈禱師……。確かに、こんなことも少しは人の役に立つよ。そう思わないかい？

だからわたしは大実母に、「純粋な信仰だけをください」とお願いしてきた。神通力なんかお願いしたことはないよ」

バララームの父、ベニー・パル、校長、マニ・マリックたちに向かってこのような話をなさっている間に、聖ラーマクリシュナは三昧に入っておられた。全く外界を忘れて絵の中の人物のように坐っていらっしやる。

三昧が解けてから、聖ラーマクリシュナは歌をおうたになった。

気が狂うほど慕わしい

あの方 何処にいるのやら

教えておくれ お友だち——

それから次は、ラームラルさんに歌うようにとおっしゃったので、彼は始めに、ガウランガの出家を――

ああ何という光景を見たことか――

師ケーシャブ・パールラテイの庵のなかで

聖ガウランガは不思議な光につつまれて

神の慈悲のよろこびに

あふれる涙は百筋の川になって流れん

ガウランガは狂った象のように

愛に酔いしれて踊り歌い

地にころげまわり、涙の川で泳ぎ

泣きながらハリの名を呼ぶその声は

ライオンの雄叫びのように

天と地にひびきわたった

ケーシャブ・パールラテイ――チャイタニヤの師。一五〇年にチャイタニヤは苦行者となり、ケーシャブ・パールラテイのもとで得度した。

そして齒にわら草をくわえ

頭を低く手を合わせて

頭に巻き毛、ヨーギーの衣をまとい

神の僕しもべとなつて家々の戸かどに立ち

救いの道を語り歌つた――

チャイタニヤヂリガア様の狂つたような愛のよろこびの描写がでたあと、タクールの表情を感じとつて、ラームラルはこんどはゴーピーたちの恋狂いの有様を歌つた。

つかむな　つかむな　この車

馬車は車で進んでも

馬車のあるじは神様ひりよ

車がまわつて世界が動く

次のうた

新しくわき出し雲間に

さし昇るみどりの月か
竹笛にくちびるよせて
その笑みに世界は明るし

アンタツチャプル
不可触賤民も神の名で清まる

神を信仰することによってカーストの区別はなくなる。タクールはマニ・マリツク氏に、「トゥルシーダースのあの話をしごらん」とおっしゃる——。(訳註、トゥルシーダース——ラーマの信者でラーマの伝記『ラーマ・チャリタ・マナーサ』を書いた人)

マニ・マリツク「チャタク鳥は喉が渴いてヒリヒリしても、ガンジス、ヤムナー、サラユの河をはじめ、河や湖に水が満々と溢れていても飲もうとしません。ただ、スワティー星座が空に昇る時に降る雨水だけを飲むために、アーンと口をあけて待っています」

聖ラーマクリシュナ「つまり、あの御方の蓮の御足を信仰することだけが肝心要で、あとのことはみな、虚仮なんだよ」

〔アンタツチャプル
不可触賤民の問題——神の名前を称えれば賤民も清浄となる〕

マニ・マリツク「トゥルシーダースの話をもひとつ。——八種の金属は賢者の石に触れるとみな黄

金になります。それと同じく、賤民と言えどもハリの名前を称えれば清浄の身になります。その反対に、ハリの名を称えざるものは、上級四カーストといえども皮剥ぎ賤民と変わる事となし「です」
 聖ラーマクリシユナ「触つては手がケガれる獣皮も、きれいになめしてからなら神殿に持ち込むこともできるよ。」

神様の名によって人間は清浄となる。だから、称名讃歌を繰り返していることが大切。わたしはジャドウ・マリツクの母さんに教えてやったよ。——死ぬときが来たら、この世の未練ばかりが頭に浮かぶだろう。家族のこと、息子や娘のこと、遺言のこと……。こんなことはばかりで頭がいっぱいで、神様の事なんかさっぱり思い浮かばないだろう。だから日常、くり返し、くり返し、称名や讃歌の練習をしていなさい。これが習慣になったら、死ぬときにあの御方の名が口にはぼつてくるから——。猫に捕まった鳥はキャーキャーわめくだけで、ラーマ、ラーマ、ハレ、クリシユナなんて言わないからね。

死ぬときの心の準備しておくのはいいことだ。人生の終わりころになったら、静かな処へ行つて神を想い、称名に明け暮れること。象も小屋に入れば、もう泥やホコリは体につかない」

バララームのお父さん、マニ・マリツク、ベニー・パル、こういった人たちはもうかなりの年寄りである。それでタクルルは、特に彼らのためを思つてこんな教訓を与えて下さつたのだろうか？

聖ラーマクリシユナは、再び信者たちに向かつてお話し下さる——

聖ラーマクリシユナ「なぜ、静かな処で独り神を想え」と言うかわかるかい？ 朝から晩まで世

間で暮らしていると、心の静まる暇がない。ほんのわずかの土地のために兄弟同士が血を流して争っている。シーク教徒たちが言っていたが、土地、女、金、この三つのためにどれだけ悩み苦しむことか、と」

〔ラーマと世俗とヴァシシユタ賢者——この世は遊び小屋〕

「お前たちは、世間にいるからといって何も恐がることはないよ。ラーマ王子が世を捨てたいというので、父王ダシヤラタは心配してヴァシシユタ賢者に救いを求めた。ヴァシシユタはラーマにこうおっしゃった。『ラーマ、君はなぜこの世を捨てるのかね？ どれ、私といっしょによく考えてみよう。神を除けたらこの世があるかね？ いったい何を捨てて、何を受け容れようというのかね？ あの御方のほかには何も存在しないのだよ。あの御方が、神やマールヤーや生き物やこの世界という形で顕れていらつしゃるのだよ』」

バララームの父「大変にむつかしいことでございますなあ」

聖ラーマクリシユナ「修行中は、この世はまぼろしの幕だ。智慧を得た後は——あの御方を覚った後は、この世は遊び小屋だ」

〔人間の姿で顕れた神——チャイタニヤ様は神の化身〕

「ヴィシユヌ派の本にあるが、信で寄り添うクリシユナは議論をすれば遠ざかる」

ただ信じることだよ！

クリシュナキシヨルのあの信念！ プリンダーヴァンで賤しいカーストの男に井戸から水を汲ませ、シヴァの名を称えさせた。そうしてから平気でその水を飲んだ。彼はいつも、神の名前を称えれば、何でその上、金を出して罪を帳消しにしてもらう必要がある！』と喋っていたよ。どうだい！ 病氣治しのためにトウルシーの葉を供えているのを見て、呆れかえっていたよ！

聖者に会いに行こうという話が出たとき、ハラダリが、『くだらないことだ。五元素でできた鞘サヤを見に行くなんて！』と言ったら、クリシュナキシユルはカンカンに怒ってこう言った。『ハラダリがそんなことを言ったとは——。聖者の体は霊であることを知らないのか』

カーリー殿の沐浴場ガートでわたしたちに言ったよ。『あんたがたも私のように、ラーマ！ ラーマ！』と称えながら毎日暮らすようにしなさい』と。

わたしがクリシュナキシユルの家に行くと、喜んで踊り出したっけ。

ラーマはラクシュマナにおっしゃった。『弟よ、歌ったり踊ったり、酔ったような信仰のあるところにわたしは居るのだ』と。

チャイタニヤ様チャイタニヤのように——神の愛に酔って笑ったり泣いたり、踊ったり歌ったり。チャイタニヤ様チャイタニヤは神の化身——神様が人間の姿で顕れたのだよ！

そして、聖ラーマクリシュナは歌をおうたいになる——

聖ガウランガはまさに恍惚として

笑い 泣き 踊り 歌う——

(一八八三年十月十日に全訳あり)

聖ラーマクリシュナ、ドツキネーシヨル南 神寺院で信者と共に——踊りと前三昧

バララームの父、マニ・マリツク、ベニー・パルたちはお暇いとまを告げた。日が暮れてからカルカッタのカンサリパラのハリ集会サバの会員たちがやってきた。

彼等といっしょになって、聖ラーマクリシュナは完全に酩酊したような有様で踊っていらつしやる。踊りの後は前三昧状態。わたしは、いくらか自分で行こうとおつしやる。

キシヨリーが足をおさすりしようとする前に進み出た。だが、聖ラーマクリシュナは誰にも触らせて下さらなかった。

日が暮れてからイシヤンも来た。聖ラーマクリシュナは前三昧状態で坐っておられる。しばらくしてからイシヤンと話をはじめられた。イシヤンはガーヤトリのプラスタヤラナ(ヴェエータに決められている犠牲供養の儀式のとき行う特別な称名)をしたいと希望している。

〔現代はヴェエータの方法より密教クシトウの道ミチがよい〕

聖ラーマクリシュナ「自分で考えている通りにしろ。もう何も疑念はないのかい？」

イシャン「私は贖罪しよびらいの儀式を行う決心をいたしました」

聖ラーマクリシュナ「この道カシヨウ（密教）ではできないのかい？ プラフマンである御方が造化力シヤクケイテイ、カーリーなんだが……。わたしは、カーリー即ちブラフマンという肝心要かなめを知ってからは、正義も不正もみんなどっかへ行っちゃった」

イシャン「チャンデイ（ヒンドゥーの聖典）の讃歌にあります。ブラフマンこそ根元アデイヤシヤクケイ造化力。ブラフマンとシヤクテイは不異おなじ、と」

聖ラーマクリシュナ「そういうことを口で言っただけじゃだめだよ。実感して初めてわかったと言えるんだ。

修行をして心が清まったら、あの御方だけが行動者カルクタイだとよくわかる。あの御方が心——生命——知性なのだ。わたしらはただの道具なんだよ。

泥沼に象をつなぐも汝、ちんばを山に登らすも汝

心が清まれば、プラスチックアラのような行事もあの御方がおさせになる、ということがはつきりわかるよ。

あなたがああなたの仕事をするに、人はワタシがすると言う

あの御方に会いさえすれば、どんな疑問もすっきり解ける。そうすれば順風おんぷが吹く。追い風が吹けば帆を張って軽く舵をにぎって、坐ってタバコをふかしている船乗りのようになる。信者は何の苦勞も心配もなくなる」

イシャンが去ると、聖ラーマクリシユナは校長と二人きりで話をされた。ナレンドラ、ラカール、アダル、ハズラーたちをどう思うか、誠実まことで表裏がないかどうか、などと校長にお聞きになった。そして、お前はわたしのことをどう思っているか、とお聞きになる。校長は答えた。「あなた様は素朴で、しかも、まことに深いお方です。あなた様をほんとに理解することは非常に困難なことです」
聖ラーマクリシユナは愉快そうにお笑いになった。